

## 意見文における問題提起の指導

小山 貴之

### 要旨

本稿では、日本語学習者に指導すべき問題提起の書き方や留意点などについて指摘をしている。具体的には、結び<sup>(1)</sup>との呼応関係、序論における背景説明と問題提起の配列、分裂文による問題提起の注意点について考察をした。本稿で述べる内容は、日本語学習者の意見文執筆の改善につながり、「問題提起」を含むさまざまなスキルを養うことで、最終的にレポートや論文の執筆も可能になるものと考えている。

### キーワード

問題提起、意見文、新聞投書、アカデミック・ライティング、文の呼応

### 1. はじめに

アカデミック・ライティング（以下、AW）は物語や随筆などとは異なり、自分の意見を論理的に主張することが主眼となる。したがって筆者の言わんとすることを明確に伝える必要があり、そのカギとなるのが問題提起である。曖昧な問題提起では論点が不明確になり、短い文章ですら何を言いたいのかわからなくなる。特に意見文における問題提起と結びの呼応は AW の基本であるにもかかわらず、結びとの呼応が一致していなかったり、問題提起の形式や位置が不適切だったり、問題提起そのものがなかったりする場合がある。従来のレポートや論文を書くための作文教科書でも、問題提起については若干の解説と文型の紹介をするにとどまっております<sup>(2)</sup>、その研究も体系的になされていない。

本稿ではその第一歩として、従来あまり意識されてこなかった問題提起の指導上のポイントを指摘した。まず結びとの間にどのような呼応関係があるのかを示し、次に問題提起に適した形式や序論における背景説明と問題提起の配列について考察をする。用例には新聞の投書を用いた。投書は文字数が400字前後と短いながらも意見文としての基本的な構造を備えているものもあり、結びとの関係や問題提起の形式・位置などの指導上のポイントを指摘するのに適していると考えたからである。なお、本稿で述べるポイントは、日本語学習者の意見文執筆の改善につながるものである。「問題提起」を含むさまざまなスキルを養うことで、最終的にレポートや論文の執筆も可能になると考えている。

### 2. 問題の所在

まず、留学生が書いた作文をもとに、問題提起（例文中の太字箇所）に関してどのような問題があるか一例を挙げる。（(P)は序論、(C)は結論）

【例1】（広東語母語話者／日本語学習歴約1年半／上級レベル）

(P) 若者の中で、親から離れて一人暮らしをしたい人が近年多くなってきた。いったい、**経済能力があまりない若者にとって、一人暮らしは本当に良いことなのか。**

(C) つまり、一人暮らしを通し、自分が成長できることでもあり、逆に、人に迷惑をかけることにもなるのであろう。人によって違う場合があるので、利点と欠点をよくバランスをしてから、人への思いやりを持って、一人暮らしを決定すべきなのだ。

この例では「若者にとって一人暮らしは良いことなのか」と、一人暮らしの良し悪しを問うているにもかかわらず、利点と欠点のバランスを考えて「一人暮らしを決定すべきである」と結んでいるため、問題提起の間に答えているとはいえない。もしくは(C)の前に「一人暮らしには良い面もあるが、～のように悪い面も多い。」という文が書かれていたとして、これを結びと解釈したとしても<sup>(3)</sup>、やはり「一人暮らしが良いのか悪いのか」を明らかにしていないので答えとしてはふさわしくない。従来の作文教科書ではこのような点については曖昧であったが、言わんとすることを明確に書かせるためには問題提起と結びの呼応にもっと細かく配慮したほうがよいと考える。母語話者には当然分かっていることでも、日本語学習者には具体的に示して意識させなければ書けないからある。

### 3. 先行研究

管見の限り、問題提起に着目した先行研究は見当たらなかった。そこで論文を書くための作文教科書では問題提起をどのように扱っているかを整理し、そこから指導上のポイントについて考えてみた。

表1 作文教科書における問題提起の扱い

	石黒 2008、石黒 2009		浜田他 2009	酒井 2009
定義	・問題提起文 <sup>(4)</sup> とは「その文章で何が問題になっているか」を設定する文である。 (石黒 2008:p. 343) ・文章全体をまとめる問を表す。(石黒 2009:p. 187)		問題提起とは「論文で取り上げる問題は何かを示す」ものである。	何について論じるかを示す「取り組んだ問題」と、その問題に取り組む理由を示す「問題意識」の2つが揃って問題提起は成り立つ。
タイプ	疑問形 疑問語疑問文 <sup>(5)</sup> Yes-No 疑問文	石黒 2009: p. 188 p. 189	疑問を示す 情報が不足 (疑問詞疑問文) 問題点がある (Yes-No 疑問文) 答えを提案	「取り組んだ問題」とは「問題である」「重要である」「なぜだろうか」といった類のこと。
	非疑問形 意思・当為の文末表現 存在を表す文 名詞述語文 分裂文		指摘する点 研究が不足 問題点がある	
呼応関係	問題提起文の「問い」によって開かれた文章は、それと呼応する「答え」の文が現れることで閉じられ、文章のまとまりが完成する。(石黒 2008:p. 345)		序論の「問題提起」で指摘した問題と結論提示で最終的に述べる結論は対応させる。	結論は、(序論の) 取り組んだ問題に対する解答である。
位置	文章の話題や前提を導入する序論の終わった直後。(石黒 2009)		背景説明のあとに位置する。	話題に関係する現象・事実・研究の現状・既存の知識などの背景説明的な文のあとに置かれる。

問題提起の定義についてみると、「その文章でとりあげる問題は何かを示す」という点は共通しているが、本稿ではそれに「文章全体をまとめる問を表す（石黒 2009:p. 187）」を加える。表 1 にもあるとおり、問題提起の「問い」によって開かれた文章は、それと呼応する「答え」の文が現れることで閉じられ、文章のまとまりを完成させる（石黒 2008:p. 345）。つまり、意見文にとって重要な論理的一貫性と明晰さの点からも、問題提起はそれと対応する結びと合せて考えることが必要<sup>(6)</sup>なのであり、これは結びとの呼応の重要性を指摘した本稿の主張とも重なるからである。次にタイプについてみると、問題提起の形式は「疑問形」と「非疑問形」に大別できる。「疑問形」はさらに「疑問詞疑問文」と「Yes-No 疑問文」に分けられるが、「非疑問形」には様々な形式がある。結びとの呼応関係については、いずれも問題提起の問と呼応させるべきものとしているが、どのように呼応させるのかについては具体的に示していない。そこで本稿では、「疑問形」「非疑問形」の形式別に結びとの呼応関係を考察する。問題提起の位置については、いずれも序論の背景説明（に相当する文）のあとに置かれるとしているが、「非疑問形」の問題提起については必ずしもそうではない。たとえば意見文の構造における先行研究では、「～賛成だ」「～反対だ」「～問題だ」のような立場表明や結論、主張などを表すものは序論の冒頭に置かれることが多いとの報告もある<sup>(7)</sup>。したがって本稿では、それぞれの配列型をどのように扱い指導すればよいのかについて考える。最後に「非疑問形」の問題提起である分裂文をとりあげる。「非疑問形」の問題提起はいくつかあるが、分裂文は命題を同じくする動詞文との使い分けなど、学習者には使い方の難しい構文の一つだからである。

#### 4. 「問題提起」と「結び」の構造

ここでは【例 1】をもとに問題提起を変化させながら、それによって結びがどう変わってくるかを考えてみたい。

(1) 若者は**なぜ**一人暮らしをしたがるのか

→親元からはなれて早く自立したいからだ

(2) 一人暮らしをすることで**何**が得られるのか

→自立心と生活力を得ることができる／強い精神力は一人暮らしでしか得られない

(3) 一人暮らしを成功させるには**どう**すればよいか

→規則正しい生活と節約を心がけることが成功の秘訣なのである

(4) 一人暮らしは**本当**によいことなのか

→よいことばかりではない／マイナス面も少なくない…

(5) 若者の自立を促すためにも、一人暮らしは**するべき**である。<sup>(8)</sup>

→（このように）自立心の旺盛な若者が増えるきっかけになるのである。

(6) 親離れできない若者が増えているのは、自立する機会がないからだ。<sup>(9)</sup>

→（つまり/このように）一人暮らしが自立のきっかけになれば、親離れできない若者も減るにちがいない。

疑問詞疑問文の場合、「なぜ」と問題提起すれば「～から」などの理由が結びとなり、「何が原因か」と問題提起すれば「～が原因である」という結びがくるのが文法的に自然である。他の「だれ」「いつ」「どこ」という問題提起も、それに応じた適切な結びがくるはずである。つまり疑問詞疑問文は問題提起で不足した情報を問いかけ、結びでそれを充

足するタイプだといえる。また Yes-No 疑問文であれば、文字通り問題提起で Yes か No を問いかけ、結びでそれに答えるタイプである。一方、「非疑問形」の問題提起は疑問詞疑問文や Yes-No 疑問文のように問いかけて問題提起するのではなく、主張や評価を最初から示すところに特徴があり、本論では演繹的に論証し結論へと至る。なお Yes-No 疑問文のように是非を問うタイプではないため、結びは論拠をまとめた考察か提言要望がくることが多い。そのため、「疑問形」の問題提起ほど結びとのつながりが強くないので、多様な文が出てきやすくなる。

## 5. 新聞の投書に見る問題提起と結び

前節を踏まえ、『朝日新聞』の「声」の欄から採取した投書をもとに、問題提起と結びの呼応関係についてももう少し詳しく考察する。

### 5.1 問題提起から見た場合

【例 2】(2008. 8. 11 朝刊)

(P) 喫煙についての規制が厳しくなって、駅や空港などの施設から灰皿が消え、最近では未成年者の喫煙防止対策として成人識別カードが発行されるようになりました。しかし、こうした社会の風潮や規制の増加と比例して喫煙者の心構えは変わっているのでしょうか。

(C) 今の日本は、灰皿を無くし未成年者の喫煙を憂えるより前に、「ゴミを捨てない」「人に迷惑をかけない」という人として最低限のことを、大人に教えることから始めなければならない社会のようです。

【例 2】の問題提起は「喫煙者の心構えは変わっているのでしょうか」と Yes-No 疑問文で問いかけているが、「最低限のことを、大人に教えることから始めなければならない」と意見で結んでいる。呼応関係としてみれば、「変わっていない」という答えが期待されるが、明示されていない。実例を集めるとこのような暗示型のものが多い。厳しい字数制限のある投書では、結論では言わずもがなとして省略されるのであろうが、正しい形式で問題提起と呼応した結びを明記しない場合、まとまりのない文章になりがちである。暗示型は上級者向けの文章指導と言えよう。では、この問題提起を疑問詞疑問文の「なぜ」に変えてみるとどうなるか。

【例 2'】

(P) 喫煙についての規制が厳しくなり、最近では未成年者の喫煙防止対策として成人識別カードが発行されるようになりました。それにもかかわらず、なぜ未成年者の喫煙は繰り返されるのでしょうか。

Yes-No 疑問文の場合、問題の焦点は「喫煙者の心構えの変化」にあったが、「なぜ」を用いた疑問詞疑問文の場合では「未成年者が喫煙を繰り返す理由」に焦点があるため結びも変える必要が出てくる。

(C) このように大人がポイ捨てなどの問題行動をとるので、未成年者の喫煙が繰り返されるのである。

結びに「ノダ文」を使い、「大人の問題行動」が理由であるという考察を述べることによって問いと答えにつながりができる。これは一例にすぎないが、学習者にはどのような文が結びの文として適切なのかを考えさせることが指導のポイントになる。

## 5.2 結びから見た場合

次に結びの文を変えた場合、問題提起はどうなるかを考えてみる。

### 【例 2''】

(C) 大人がこのような問題行動をとるかぎり、未成年者は喫煙を繰り返すと思われます。

この結びに対して、問題提起を「なぜ」とすることはできない。従属節に「かぎり」という条件があるので、「大人が問題行動をとり続ける」という状況下では「未成年者の喫煙は繰り返される」という意味になる。つまり「繰り返すか」「繰り返さないか」に焦点が当たっていると推測すれば、Yes-No 疑問文を使った問題提起のほうが適切だということになる。たとえば以下のような文である。

(P) こうした社会の風潮や規制が増えれば、未成年者の喫煙に歯止めがかかるのでしょうか。

つまり結びが変わると今度は問題提起も同じパターンは使えなくなるので、両方の面から呼応の適切さをみていかなければならないのである。さらに【例 2】の結びを次のように変えてみるとどうなるか。

### 【例 2'''】

(P) しかし、こうした社会の風潮や規制の増加と比例して喫煙者の心構えは変わっているのでしょうか

(C) ? (このように) 喫煙者の意識は変わってきており、喫煙防止対策の効果が影響しているものと思われる。

【例 2'''】は Yes-No 疑問文の問題提起に対して Yes と答えているが、問題はこの Yes という答えである。たしかに結論は Yes と No のどちらにでもなりそうだが、この場合は No と答えるべきであろう。始めに冒頭で、社会全体では喫煙防止対策が進んでいるという背景説明があり、それに対して「しかし」と展開し疑問を提示しているのだから、結びに No を期待するのが自然である<sup>(10)</sup>。それにもかかわらず、「喫煙者の気持ちも変わっている」のように Yes で結んでは、何のために「しかし」を使って Yes-No 疑問文を焦点化したのかわからなくなる。つまり論証型の意見文に Yes-No 疑問文を問題提起として用いる場合

は、前後の文脈や「しかし」のような言語的指標によって Yes と No のどちらで結ぶのが適切か、注意をする必要があるのである。

## 6. 新聞の投書に見る「非疑問形」の問題提起

次に本節では、序論における位置や問題提起の形式について、「非疑問形」の問題提起を例に考察する。

### 6.1 「非疑問形」の問題提起が登場する位置

まず【例3】と【例3'】を見ていただきたい。ある投書の序論部分を抜粋して問題提起の位置を変えたものである。

【例3】(2009.7.20 朝刊)

(P)「店員さんの受動喫煙を防げ」(4日)という投稿を読んだ。日本では飲食店の禁煙がなかなか進まず、受動喫煙により健康被害を受けるのは客以上に店員であるという内容だった。この意見に私も賛成である。

【例3'】

(P)「店員さんの受動喫煙を防げ」(4日)に私も賛成である。日本では飲食店の禁煙がなかなか進まず、受動喫煙により健康被害を受けるのは客以上に店員であるという内容だった。

「非疑問形」の問題提起は、【例3】では序論末尾に、【例3'】では序論冒頭に位置している。【例3'】のような主張や結論が冒頭にくる「演繹型」の書き出しは欧米のライティング教育を受けた学習者の作文によくみられ、日本語の意見文にもしばしば登場する。一方、【例3】のような背景説明のあとに主張や結論がくる「帰納型」の序論構成が日本語の意見文には適しているとの報告もある<sup>(11)</sup>。ここで指摘したいのは、どちらが良いかということではなく、どの段階では何を指導するのが適切かということである。二通(2001)は、書き手が考え方をまとめるプロセスにおいては「帰納型」が自然であるが、論理的な文章においては「演繹型」のほうが効果的であるとしつつも、「演繹型」の場合は自分が得た結論を意識的に前にもってくる操作が必要なため、意識して習得させる必要があると指摘している。また、山本(1999)は「どのような順序で頭に浮かんだものを言葉にしていくかということは自然な日本語の習得の基本」であり、「複数の文をどのように並べるかは、作文にも読解にも関わるので、中上級では十分に学習者の能力を伸ばさなければならない点である」と述べている。これらを踏まえるのであれば、意見文指導の初期段階では考え方をまとめるプロセスに沿った「帰納型」をまず身につけさせ、そこから派生して「演繹型」を紹介するという指導手順がひとつ考えられるだろう。いずれにしても、学習者のわかりやすいように系統的に整理して導入する必要がある。

なお、言語形式が同じでも位置によって機能が変わるものとして疑問文の例がある。序論の背景説明のあとに出てくれば問題提起だが、結論に「のではないだろうか」のような言語形式で出てくれば終了の機能を果たすことが多くなる(石黒 2008:p. 292-p. 293)。木

戸 (2008) は全く同じ文 (命題) であっても、個々の要素の位置によって形態上に違いが生じる場合があり、文章構造上の機能も異なることを指摘しているが、配列は日本語の特徴と関わり、わかりやすさや表現効果にも大きく影響するので、重要な指導項目となる。

## 6.2 分裂文の問題提起

最後に分裂文による問題提起について考えてみたい。【例 4】は投書から抜粋した序論と本論の一部である。(M) は本論)

【例 4】(2009.5.14 朝刊)

(P) 親類の結婚式に招かれて名古屋の会場に出かけた。1日に何組もある大きな結婚式場である。式が始まるまで、ロビーや控えの間で待ったが、**我慢できなかったのはたばこの煙だった。**

(M) 披露宴が始まった。テーブルに着くと灰皿が置いてあった。しばらくするとあちらこちらから煙が上がり始めた。「ええー。禁煙じゃないの。やめて」。私は叫んだが、そんなことお構いなし。喫煙はやまなかった。私は長い時間、煙を吸う羽目となった。せっかくの料理も台無しになってしまった。

砂川 (2005) では分裂文について「ハ分裂文は述語に焦点を提示する後項焦点文」(p. 257) であり、「述語で示された指示対象が後続の重要な談話主題として語り継がれる傾向が高い」(p. 200) と述べている。また「分裂文は主題を持続させる機能がある一方で、談話を締めくくり、そこで一定の境界が生じたことを示すコピュラ文の機能も持っている。」(p. 177) とある。つまり分裂文は序論の末尾に位置して焦点化する問題を取りあげ、そこで一端区切りをつけて本論へ橋渡しをする働きがあると言える。横田・伊集院 (2009) でも分裂文による主題化機能を取りあげ「この文型を効果的に用いることにより、すでに提出されている情報を次の段落の主題として取り上げ、段落間に結束性を生み出す効果が生じる」と述べている。【例 4】をみると、分裂文 (P) の「我慢できなかったのはたばこの煙だった」の後項部分「たばこの煙」が後続の本論で談話主題として語り継がれており、論証の材料に使われていることがわかる。では【例 4'】のように分裂文をふつうの動詞述語文にするとどうか。これでは筆者の気持ちを事実として報告しただけの印象になってしまうが、留学生の書く作文にはこのようなものが少なくない。

【例 4'】

(P) 式が始まるまでロビーや控えの間で待ったが、**たばこの煙にはがまんできなかった。**

一方で、何でも分裂文にすればよいかというとそうではない。ハ分裂文の述語には指示対象だけでなく、出来事や状態などさまざまな情報が提示されるため、述語には名詞だけでなく従属節や副詞的表現が用いられることがある (砂川 2005:p. 257)。しかし、あまり

にも長い情報は後続の談話主題として語り継ぐのに読み手の認知的負担が大きくなるため、次のように長い従属節が述語にくる分裂文は問題提起としては適さない。

【例 5】(2009. 3. 2 朝刊。太字部分は修正を加えた。)

(P) 先日、JR 鶴見駅前にあるファストフード店の 2 階に上がった。昼過ぎで親子や学生のグループなどで込んでいた。しかし、**閉口したのはたばこの煙がもうもうと立ち込める不快な室内だった。**

分裂文は問題提起としての機能のほかに、段落の冒頭に位置して話題を提示する機能もあるが、いずれにしても重要なのは「分裂文と非分裂文は機能が異なるゆえに、その後の談話展開も異なる」(砂川 2005:p. 210) という点である。作文指導の際に留意すべきはこの点で、分裂文の使うべき位置や機能、適切な形式などと合わせて指導する必要がある。

## 7. まとめ

本稿では問題提起を例に、従来はあまり意識されてこなかった以下の点について指摘した。

- i) 問題提起の形式が変化すれば、結びの形式も変化するのであり、学習者にはどのような文が適切なのか、両方に配慮して考えさせる必要がある。
- ii) 論証型の意見文の問題提起が Yes-No 疑問文の場合、Yes と No のどちらで結ぶのが適切か注意をする必要がある。
- iii) 結論や主張を表す「非疑問形」の問題提起の位置について、序論の背景説明のあとにおく「帰納型」と、序論の冒頭におく「演繹型」があるが、どちらを取り上げるにしても系統的に整理して導入をする必要がある。
- iv) 文単位では正確でも、問題提起には適さない形式がある。具体的には、分裂文で問題提起するべきところを動詞文にしてしまうケースや、分裂文の述語に長い従属節などをおくのは問題提起の形式としては適さない。

本研究は、まだ初期段階にあり、今後さらに多くの資料を収集・分析することによって、本稿で述べたことを量的・質的に検証することが必要である。また、問題提起について、分類・形式・特徴などの体系化をしていくことにより、AW の段階的かつ具体的な指導法の提言につなげていきたい。

(小山貴之 こやまたかゆき・創価大学・koyal1takal@yahoo.co.jp)

## 注

1. 本稿では「結び」は問題提起の問と呼応して答えを示すもの、「結論」は意見文の最後に位置する構成部分として区別した。
2. アカデミックジャパニーズ研究会 (2002)、佐渡島他 (2008)、友松 (2009) など。
3. 問題提起と呼応する「結び」は必ずしも文章の最後に置かれるとは限らず、本論の冒頭か末尾、あるいは結論の冒頭などにおかれる (浜田他 2009、酒井 2009)。
4. 石黒 (2008) (2009) では「問題提起文」と記載されており、そのまま引用した。



5. 石黒 (2009) では「疑問語疑問文」と記載されており、そのまま引用した。
6. 文章指導の面から補足をすると、自分が主張したいことがあるから意見文を書くわけであり、書く際にはまず自分の主張を明確にして、それにふさわしい問題提起を考えるとという手順を取ることになる。
7. 伊集院他 (2012)、佐々木 (2001) など。
8. 石黒 (2008:p. 188) を参考にした。
9. 石黒 (2008:p. 189) を参考にした。
10. 安達 (1999:p. 24)、石黒 (2008:p. 155)、仁田 (1991:p. 148-p. 149) でも、このような現象をとりあげており、「傾き」と呼んでいる。
11. 樺島 (1999:p. 78-p. 79, p. 181-p. 182) など。

## 参考文献

- アカデミックジャパニーズ研究会 (2002) 『大学・大学院 留学生の日本語〈4〉論文作成編』
- 安達太郎 (1999) 『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版
- 石黒圭 (2008) 『日本語の文章理解過程における予測の型と機能』ひつじ書房
- 石黒圭 (2009) 『よくわかる文章表現の技術Ⅱ-文章構成編-[新版]』明治書院
- 伊集院郁子・高橋圭子 (2012) 「日本・韓国・台湾による日本語意見文の構造的特徴-「主張」に着目して-」『日本語・日本学研究』2、1-16
- 樺島忠夫 (1999) 『文章表現法～五つの法則による十の方策』角川書店
- 木戸光子 (2008) 「文章構造における冒頭文と末尾文の統括機能と形態上の特徴」『文藝言語研究. 言語篇』53、33-49
- 酒井聡樹 (2009) 『これからレポート・卒論を書く若者のために』共立出版
- 佐々木泰子 (2001) 「課題に基づく意見の述べ方-日本人大学生の場合・日本語学習者の場合-」『日本語教育のためのアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成 11・12 年度科学研究費補助金研究基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書 (研究代表者 宇佐美洋) pp. 219-230
- 佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック ライティングの挑戦 15 週間』ひつじ書房
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点』くろしお出版
- 友松悦子 (2008) 『小論文への 12 のステップ-中級日本語学習者対象』スリーエーネットワーク
- 二通信子 (2001) 『アカデミック・ライティング教育の課題--日本人学生及び日本語学習者の意見文の文章構造の分析』学園論集 110、61-77
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (2009) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』(改訂版) 26-28、64-68
- 山本忠行 (1999) 「予測能力の育成と中上級の指導」『創価大学別科紀要』13、12-27
- 横田淳子・伊集院郁子 (2009) 「『JLC 日本語スタンダード』に基づいた初級段階における文章表現指導の試み」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』35、87-102